

(論 文)

展 示 と 陳 列

— 博物館・博物館学・展示学に於ける用語の適否に関する一考察 —

邊 見 端

1.

私は、国語学者でも、国語の教師でもない。博物館学を専攻するごくありふれた日本人の一学徒である。

そのような私ではあるが、国語で書かれた博物館や博物館学に関する著書や雑誌掲載の論文などを読むたびごとに常々気に掛かってきたことがある。それは、一般に「国語(言葉)の乱れ」と総称される範囲のものである。勿論、本来その「乱れ」の中には、片仮名言葉や俗語の問題も含まれようが、とりわけ気に掛かるのは言葉の誤用と思われるものについてである。

博物館や博物館学、或はそれらと関係の深い展示学の中では、他の諸学同様、特定の言葉が頻繁に用いられ、あたかも専門用語であるかのような観が認められる。ところが、そのような言葉に限って使われ方には必ずしも一定したものがなく、様々な意味に用いられることが多い。無論、言葉には、その成り立ちに応じて複数の語義を伴うことは十分に承知している。しかし、それにも拘らず、どうみても納得し難い意味に使われているものの存在に気付いて閉口することが多いのである。しかも、中には、国語の常識からみて到底あり得ないと思われるような意味に使われているものもあり、迷惑することがしばしばある。況して、それが学界の指導的立場にある学者によって書かれたものとなれば、その言葉が用いられた真意をはかりかね甚だ心もとない思いをさせられることもある。

結局、そのように一つの言葉が規律なく様々な意味に使われるとするならば、読み手や聞き手に対する意志の円滑な伝達が阻まれ、博物館界や、博物館・

展示両学界は徒に混乱し、延ては誤解の機会だけが増える原因ともなりかねないのである。

そこで、今ここに、それらの世界では極めて冷淡に扱われつつある「陳列」と、逆に使われる機会が多く専門用語の観を深めている「展示」とを取り上げ、この問題について考えてみることにする。

2.

先ず「陳列」の使用例について検討を試みることにする。

この語は、元々国語として、品物等を「並べる」意の普通名詞に、またはサ行変格活用他動詞に用いられてきた。そして、その語義は、例えば『日本国語大辞典』第13巻(小学館、昭和50年刊)に拠れば、次のように解説される(605頁)。

ちん-れつ【陳列】【名】 並べつらねること。

また、ずらりと並ぶこと。多く人に見せるために物品を並べることをいう。*続日本紀—和銅三年正月壬子「給 陳 列 之 於 大 極 殿」*地蔵菩薩靈驗記—・五「堅甲利器陳列(チンレツ)して幡を靡かし屯を張と云とも」*西国立志編<中村正直訳>11・17「學術の為に天工人造の万物を陳列する大院」*虞美人草<夏目漱石>14「はあ大分奇麗な本が陳列してゐる」*漢書—朱買臣伝「陳 列 之 於 殿」

そこで、昭和20年代に到るまでの博物館に関する書物を繙くと、資料の排列についての項目は、「陳列法」等と表現されることが極く当前であった。そして、その後、如何なる事情によるかは俄に判断しかねる

*へんみ はじめ

が、これに替って「展示法」等が用いられるようになっている。そんな訳で、博物館やそれに係わる学問の世界では、現在、死語とは言わないが、極めて稀にしか用いられることがなく、況して章・節の見出語として登場することはなくなった。

勿論、ものを「並べる」ことを「陳列」と表現することは、相変らず国語の中に生きており、後に引用する博物館関係書籍中に於ても時折見掛けるところである。

一方、博物館学関係者の中には、この語が示す行為、または、その行為の結果としての状態には「見る人への配慮」が稀薄とみる捉え方や、この語を「何らの意図も思想もなく、ただ雑然と並べる」の意とする捉え方が存在する。例えば、倉田公裕氏は「美術系博物館——その展示の基礎」(『博物館学講座』第7巻、雄山閣出版、昭和56年刊)の中で、

陳列 (Display) とは、文字通り、“もの、を列をなして陳べるの意味であり、そこではあくまで“もの、が中心で、見る人への配慮がないと言うことでもないが、希薄であるように感じられる。

したがって、いまだに陳列室とか陳列とかの語を用いている美術館は、まだ旧来の“もの、中心の陳列を行っているきらいがあるようである。

と述べ (160頁)、加藤有次先生は『博物館学序論』(雄山閣出版、昭和52年刊)の中で、

従来の博物館の、「資料」を並べて観せる方法には、きわめて主観的なものが多い。それは、博物館が「もの」を並べて見せてやるという考えの流れがあるからで、その並べ順を追ってみつてみると、単に宝物の羅列であって、そこには何の意図も思想もみとめることはできない。これを「陳列」という言葉で表現することができる。

と述べておられる (97頁)。これらは、現代の国語の常識を遙に越えた解釈と言えよう。果して、この語をそのような意味で使うことが可能なのであろうか。

「陳列」は、元来漢語である。それ故、その可能性の有無を漢語に於ける語義の中に探ってみることにする。諸橋轍次氏著『大漢和辞典』巻11 (大修館書店、昭和34年刊) は、

【陳列】^{チン} ならべつらねる。(漢書、朱買臣傳) 相繼^シ排^ハ陳^{チン}列^リ中^{チュウ}庭^{テイ}。〔列女傳、賢明、鄒下愚、敬^{ケイ}陳^{チン}〕陳^{チン}列^リ其^キ亡^{ワウ}亡^{ワウ}。〔景^{ケイ}帝^{テイ}、紀^キ易^イ〕。〔杜^ト預^ヨ〕 卑^ヒ下^カ卑^ヒ下^カ十^シ世^セ殺^シ。〔歐^{オウ}〕 陳^{チン}其^キ辭^ジ者^{シャ}、公^{コウ}陳^{チン}其^キ辭^ジ。〔史^シ記^キ〕 從^{ジュウ}其^キ言^{ゴン}、終^{シュウ}其^キ言^{ゴン}。〔史^シ記^キ〕

と説明し (875頁)、諸橋轍次・鎌田正・米山寅太郎三氏著『広漢和辞典』下巻 (大修館書店、昭和57年刊) は、

【陳列】^{チン} つらなりならぶ。また、つらねならべる。ならべる。(鄭^{テイ}風^{フウ}、朱買^シ臣^{チン}傳^{デン}) 相^シ繼^{ケイ}排^ハ陳^{チン}列^リ中^{チュウ}庭^{テイ}。〔景^{ケイ}帝^{テイ}、紀^キ易^イ〕。〔杜^ト預^ヨ〕 卑^ヒ下^カ卑^ヒ下^カ十^シ世^セ殺^シ。〔歐^{オウ}〕 陳^{チン}其^キ辭^ジ者^{シャ}、公^{コウ}陳^{チン}其^キ辭^ジ。〔史^シ記^キ〕 從^{ジュウ}其^キ言^{ゴン}、終^{シュウ}其^キ言^{ゴン}。〔史^シ記^キ〕

と記している (1107頁)。これらを読む限り、漢語に於ける語義もまた現代国語と同じである。

要するに、この語は、元々「並べる」ことを意味し、そこには、その行為の在り方や、結果についての内容を含むことはない。実行者次第で、時には、見る人への配慮を伴う陳列や、何らかの意図や思想に基づいた陳列がなされ、時には、見る人への配慮を伴わない陳列とか、全く意図も思想もない無計画な陳列が行われることもあり得るのである。

従って、前に例示した博物館学関係者による用例は、誤用以外の何ものでもない。そしてまた、「陳列室とか陳列とかの語」を使用する美術館を時代遅れであるかのように見るのは、その人自身の国語や漢字に関する知識の貧困さを露呈するものにすぎない。

3.

次に、「展示」の用法について検討を試みることにする。その実際の用例を集成すると、四つに分類することが出来る。先ずそれらの各類について、各々の具体例や、そのような使い方が存在することを示す文を博物館学者らの著述の中から例示しつつ紹介することにしよう。

〈A 類〉

「陳列」と同義、即ち「並べる」及び「排列する」の意に使われるもの。

*木場一夫『新しい博物館——その機能と教育活動——』(日本教育出版社、昭和24年刊)

展示品をケースに展示するには、展示品の性質・形状によつて色々な方法が工夫されなければならない。(57頁)

展示室に展示された標本や模型などには、丁寧

な説明がつけてあつて、…… (87頁)

* 棚橋源太郎『博物館學綱要』(理想社, 昭和25年刊)

而して研究資料はこれを貯藏室に収容し, 陳列資料はこれを陳列館に展示すべきである。(139頁)

* 倉田公裕「美術系博物館——その展示の基礎」(前掲『博物館學講座』第7巻)

つい先頃まで, 陳列と展示は同意語として扱われてきたが, 最近ではほとんど展示という言葉が用いられ陳列という言葉は全り用いられなくなっている。(160頁)

<B類>

「目的と思想をもって並べる」の意に使われるもの。A類と近似するが, 目的と思想の存在を「並べる」行為の前提とする点が異なる。

* 加藤有次『博物館學序論』(前掲)

しかし, 今後, 博物館のなかに「もの」を並べるということには, 一貫した理念がなければならない。単なる並列, 羅列ではなく, 並べること自体に目的をもたせ, 思想をもたせて, そこに並べられている資料が観る側の人を説得するものでなければならない。このような考え方にもとづいて「もの」を並べること, 「陳列」から区別して「展示」というのであるが, 以後, 「展示」という言葉を, そのような概念として扱うこととする。(97~98頁)

<C類>

「並べられた状態」「排列が完成している状態」の意に使われるもの。

* 林公義「展示」(伊藤寿朗・森田恒之編『博物館概論』学苑社, 昭和53年刊)

観覧者は自由意志で展示をみているので, 何かの圧力が加わると自由意志が消失し, 結果的には精神的に負担の多い展示という評価が下される。全体として観覧者の知的レベルを知らず知らずのうちに向上させ, 次の展示では何が得られるのかという本人の意志が無意識に出てくるような展示方法がいわゆる理想ではないだろうか。(329頁)

* 新井重三「展示概論」(前掲『博物館學講座』第7巻)

わが国の博物館管理者は展示は半永久的寿命をもっていると信じているらしい。公立の博物館では新設館の展示費は別として, 展示替の予算とか, 修理, 補修費は予算化の困難な費目なのかも知れない。(26頁)

* 佐々木朝登「展示の構成と実施」(前掲『博物館學講座』第7巻)

展示フローシートで示した博物館建設の過程は, 本来, 博物館は建築を見せるのが目的ではなく, 展示を見せる所である。(98~99頁)

<D類>

「ものを並べて人々に見せる」の意に使われるもの。

* 棚橋源太郎『博物館學綱要』(前掲)

展示目標の確認 博物館の展示方法は, また陳列資料の性質とその展示の目的とに依つて違はなければならない。博物館で物品を陳列する目的は, 第一は物品を観衆の眼に愉快に映ぜしめること, 第二は知識傳達の方便として物品を利用すること, この二つ以外には出でない。(157頁)

4.

扱次に, 以上四種の「展示」の用法の適否について考えてゆくことにしよう。

この言葉は, 第二次世界大戦終結前の国語辞典には登場することがなかった。終戦後になって初めて収録されるようになる。例えば, 昭和27年刊行の金澤庄三郎氏編『廣辭林』(三省堂刊)の新訂1153版にはなく, 昭和33年に刊行された新版初版に到って,

てんじ〔展示〕(名) ひろげて示すこと。「一会」と記されるようになる(1440頁)。そして, 現在では殆どの辞書が収録するところとなっている。その語義について, 前掲『日本国語大辞典』第14巻(昭和50年刊)は,

てん-じ【展示】【名】 品物, 作品などを並べて一般の人人に見せること。ディスプレイ。

* 特許法一・二条・三「譲渡若しくは貸渡のために展示し」

と記している(332頁)。

即ち, この言葉には, 他者に対して, 広げたり並べたりして「示す」とか「見せる」という意味が存在している。「広げる」「並べる」という前提あって

変わらない。従って、A 類同様、その用法は誤りである。

C 類は、「並べられた状態」「排列が完成している状態」の意に使われるものである。勿論、この類の使い手が展示と呼ぶその「状態」は、たとえ人々に示したり見せたりすることを目的としていたとしても、それは「示す」とか「見せる」行為そのものではない。それを行うために用意された資料と、資料およびその利用者に対する配慮との集合体である。そのような意とする使い方は、既に紹介したように、国語や漢語的な表現の中に存在する可能性がない。従って、これも誤用にすぎない。

D 類は、「ものを並べて人々に見せる」の意とするものである。これは、国語本来の用法である。

各人によって書かれたものを読むと、確かにこの意に使われているものが多い。しかし、注意を要することは、博物館や博物館・展示両学の関係者の間では、この意に徹して用いられることは少なく、むしろ同一文中に於てすら、A 類や C 類と混用される傾向にある。ここに、我々は、この語の乱れの実態の深刻さを垣間見ることが出来るのである。

以上、述べ来った A・B・C 各類への批判に対して、林氏が前掲『博物館概論』の中で「展示」を「博物館用語」と見做しているが (301頁)、これと同じ立場に立って反論する向きが一部にはあるかも知れない。しかし、現在のところ、この言葉をそのように扱おうという合意が博物館界や博物館学界には存在しない。だからこそ、各氏各様の使用法が登場したのである。

仮に、それらが館界や学界の合意に基づく「博物館用語」としての概念規定の結果登場したものであったとしても、国語本来の用法を蔑ろにするものについては、それが判明し次第、言葉の誤用として排斥しなければならない。とりわけ漢語的な表現をとるものについては、漢字の常識を逸脱することは許されない。大体、漢字は、音を示すのみならず内容をも伴うものであるから、それが熟語となって表現する概念は、故事成語でない限り、通常それを構成する個々の漢字によって制約を受けることになる。勿論、逆に新たな用語をつくる場合には、常に概念を表わすのに最も相応しい字義を具えた漢字が用意されなければならない。もし、これらのことを無視

して、言葉にそれを構成する漢字の内容と懸離れた概念を与えたとするならば、そこに用いられた漢字は、最早単なる符帳にすぎず、その文字を使わなければならない理由が失われてしまう。そして、そのみならず、与えられた概念と漢字に具わる内容との差が因となって国語を混乱させることにもつながるのである。

兎も角、既に縷言したように、A・B・C 各類は、いずれも国語の用法と漢字の字義を無視した典型的な言葉の誤用であった。それ故に、如何なる弁護を講じようとも、それらには、今後、生命を保ち得る餘地が全く残されていないのである。

因に、「展示」の語義を英単語によって説明しようとする傾きもあるようだが、これとて慎重を要する。例えば、林氏は Display (『博物館概論』301頁) に、倉田氏は Exhibition (『博物館学講座』第7巻160頁) に当てているが、これに際しては、少なくとも国語・漢字、そして英語についての基礎を十分に踏えた上で試みられることを望みたい。

5.

これまで述べた諸点について纏めるならば、「陳列」とは、ものを並べることである。そのものが如何ように並べられるかは、この語とは全く関りがない。実行者の意図・意志に係る問題である。

「展示」とは、ものを並べたり広げたりして見せる、または示すことである。それは、ものを並べたり広げたりすることではなく、並べ或は広げたものを見せたり示したりする行為である。従って、人々に見せる為にもものを並べまたは広げることは、見せる行為が未だ開始されていない状況下で実施される行為故、陳列ということになる。そしてまた、ものが並べられた状態、即ち展示資料が置かれるべき位置に置き終えてある状態は、矢張り見せる行為ではないので展示とは言えない。

たまたま七氏の文を例示したが、同様の混乱は、博物館や展示関係の著作物の各所に見受けられる。今これを正さない限り、博物館や、博物館学とか展示学と呼ばれる学問は、国語の中で孤立する存在となろう。そののみならず、それらに関係する者達でさえも、お互いの言葉の用法がそれぞれ異なる以上、聞くにしても、読むにしても、一つ一つの語義の判

断をめぐって徒に時間を空費し、時には誤解の渦に巻き込まれることになろう。

博物館学や展示学は、歴史の浅い新しい学問である。そこで使われる専門的な言葉の多くは、精々三四十一年位の歴史しかもっていない。従って、妥当性を欠く用語があったとしても不思議ではない。それらについては、他の諸学が明治維新のこのかた百数十年の間に経験したと同じように、勇気と柔軟さをもって、正してゆく態度が必要である。今、これを実効をもって行い得るのは、それらの学界と係りが深い日本博物館協会と、全日本博物館学会と、全国大学博物館学講座協議会と、日本展示学会であろう。以上の四会が率先して英智を結集し、これに当られることを期待する。

このことが実現するならば、博物館学が元来、博物館の健全な発展に寄与することを目的とし、展示学もまた同様のことを目的としていることから、博物館で使われる言葉の正常化も自らはかられることになるであろう。

これで本論は終わるが、擱筆に際して一言付け加えておく。このように、陳列は兎も角として、展示の字義について厳しく批判を展開してくると、「自分のことを棚に上げて、他人の粗をあげつらっている」とお叱りを受けるかも知れない。申し遅れたが、実は、私自身も五六年前までは、A類やC類の誤りをおかしてきた。しかし、だからといって私のような浅学者の文を例に出したのでは、学界全体の趨勢を紹介するには信憑性が弱く、説得力にも欠ける。そこで、敢て学界に重きをなす方々の文を組上に載せさせていただいた次第である。関係する方々には、このことについての御寛恕を乞うと同時に、ここで取り上げた問題については是非御検討下さるようお願い申し上げたい。

付.

博物館（美術館・動物園等を含む）に係る人々には、言葉の用法について、もう一言強調しておきたい。

博物館の活動には、資料を欠くことは出来ない。資料なくして博物館は存在し得ない。そこで各館の職員は、自分の専門・非専門を問うことなく、勤務先が保管する資料の保存・育成に精励し、そして時には、館外に於ける同様の資料についても、その保

護・保存に協力したり、或はその必要性を率先して訴えたりすることにもなる。

これは、単に博物館活動の基礎となるべき資料の保存と、将来に於ける資料供給の円滑化を目指しての環境づくりの為だけに行われていることではない筈である。

大体、このような専門的な活動に携わる博物館職員は、それぞれの資料の所属分野を専攻する学者である。その学者が、学者として第一に守るべき義務は、自らが専攻する学問の資料の保護・保存である。この資料なくして、その学問は立ち行かないからである。縦令、記録や図を作り、写真を撮っておいたとしても、時間の推移と共に学問や技術は進歩し、以前の記述や図・写真では、真実の解明には程遠い存在となる。また、仮令それらの観察記録が作られて間もない時期であったとしても、それらは、それらを作成した人の能力の範囲内で表現されたものにすぎず、資料に具る内容の総てを漏らさず物語っているとは限らない。そこで、研究とか、真実の探究に際しては、常に真物としての原の資料に直接する必要が生まれてくる。従って、博物館に勤務し、資料を専門に扱う職員は、この面からも、資料の保存・育成に熱心でなければならないのである。そして、このことを行う時、学問というものは単独に存在するものでなく、総ての学問が、直接に、或は間接にお互いに係り合っているという現実を考えるならば、自分の専門分野の資料の保存にさえ意を注げばよく、他の分野の資料は蔑ろにしてよいということには決してならない筈である。勿論、無闇矢鱈に専門外のことに出せ、と言っているのではない。少なくとも、保護・保存の害になるようなことをしてはいけないということである。

このことを考える時、言葉とて同じな筈である。それは、国語学の資料であり、これまでの歴史を反映した大切な文化遺産でもある。それ故に、それを用いる時には、好加減に扱ってはならないのである。たとえ学術用語として使用する場合であっても、また外国語の翻訳語を作る場合であっても、今現実に使われている言葉の意味を無視して、新たな概念を付加することは容認されるべきではない。それは、国語資料を破壊し、文化遺産を破壊するのみならず、国語を混乱させることにもつながるからである。